

蹇蹇錄

第一章 東學黨ノ亂

朝鮮ノ東學黨ナル者ニ對シテハ内外國人種々ノ解釋ヲ下セリ或ハ儒教道學ヲ混合シタル一種ノ宗教的團結ナリト云ヒ或ハ朝鮮國內ニ於ケル一派政治改革希望者ノ團體ナリト云ヒ或ハ單ニ好亂的兇徒ノ嘯集スル者ナリト云ヘリ今其性質ヲ討究スルハ茲ニ必要ナケレハ畧ス要スルニ此名稱ヲ有スル一種ノ亂民ハ明治二十七年四五月ノ交ヨリ朝鮮國全羅忠清兩道ノ各處ヨリ蜂起シ所在民舍ヲ劫掠シ地方官ヲ驅逐シ漸ク其先鋒本部ヲ京畿道ノ方ニ進メ全羅道ノ首府タル全州府モ亦一時ハ其手裡ニ落チ勢頗ル猖獗ナリシハ事實ナリ而シテ日清兩國カ各其主張スル所ノ權利ト持論トニ因リ互ニ其軍隊ヲ韓地ニ派遣スルニ至リタルコトモ其後幾回カ形勢ノ變轉ヲ經テ日清兩國ノ海陸戰

争トナリタルコトモ我軍連戦連捷ノ後清國政府ハ兩回迄
其使臣ヲ我ニ送リテ和ヲ乞ヒ竟ニ下ノ關係約ニ因リ從來
日清兩國ノ外交ノ關係ヲ一變シ世界ニ於テ日本ヲ東洋ノ
優等國ト認識スルニ至リタルコトモ其近因ハ清韓兩國ノ
政府カ此東學黨ノ反亂ニ對スル内治外交ノ道ヲ誤リタル
ニ存セスムハアラス他日若シ日清兩國ノ間ニ於ケル當時
ノ外交歴史ヲ草スルモアラハ必ス其開卷第一ニ先ツ東
學黨ノ亂ナル一章ヲ置カサルヲ得サルヘシ
東學黨ノ勢日ニ月ニ強大トナリ朝鮮ノ官軍ハ到ル所ニ敗
走シ亂民終ニ全羅道ノ首府ヲ陷レタリトノ報我國ニ達ス
ルヤ本邦ノ新聞紙ハ争テ之ヲ紙上ニ傳ヘ物議爲メニ驟然
或ハ朝鮮政府ノ力到底之ヲ鎮壓スル能ハサルヘケレハ我
ハ隣邦ノ誼ヲ以テ兵ヲ派シ之ヲ平定スヘシト論シ或ハ東
學黨ハ韓廷暴政ノ下ニ苦ム人民ヲ塗炭ノ中ヨリ救出サム
トスル眞實ノ改革黨ナレハ宜シク之ヲ助ケテ弊政改革ノ

目的ヲ達セシムヘシト云ヒ特ニ平素政府ニ反對セル政黨
者流ハ此機ニ乘シテ當局者ヲ困蹙セシムルヲ以テ臨機ノ
政畧ト考ヘタルニヤ類ニ輿論ヲ煽動シテ戰爭的氣勢ヲ張
ラムコトヲ勉メタルモノ、如シ當時朝鮮駐劄公使大島圭
介ハ賜暇歸朝中ニテ任所ニ在ラサレトモ臨時代理公使杉
村濬ハ朝鮮ニ在勤スルコト前後數年頗ル其國情ニ通曉ス
ルヲ以テ政府ハ勿論其報告ニ信據シ居タリ而シテ杉村カ
五月頃ノ諸報告ニ據レハ東學黨ノ亂ハ近來朝鮮ニ稀ナル
事件ナレトモ此亂民ハ現在ノ政府ヲ顛覆スル程ノ勢力ヲ
有スルモノト認ムル能ハス又其亂民ノ進行スル方向ニ因
リ或ハ我公使館領事館及居留人民ヲ保護スル爲メ我國ヨ
リ多少ノ軍隊ヲ派遣スヘキ必要ヲ生シ來ルコトアルヘキ
ヤモ測リ難ケレトモ目下ノ處ニテハ京城ハ勿論釜山仁川
ト雖モ夫程ノ懸念ナシト云ヘルカ故ニ我政府ハ此時ニ於
テ出兵ノ問題ヲ議スルハ稍太早タルヲ免レストナセリ然

レトモ常ニ亂雜ナル朝鮮ノ内治動モスレハ軌道外ニ奔馳
スル清國ノ外交ニ對シテハ豫メ之カ計ヲナサ、ルヘカラ
スト信シ余ハ杉村ニ内訓シ東學黨ノ舉動ヲ十分ニ注目ス
ルト同時ニ韓廷ノ之ニ對スル處分如何及韓廷ト清國使臣
トノ關係如何ヲ怠ラズ觀察スヘキコトヲ以テセリ
此時ニ方リテ我邦ハ正ニ議會開會中ニシテ衆議院ハ例ニ
依リ政府ニ反對スルモ多數ヲ占メ種々ノ紛争ヲ生シタ
レトモ政府ハ成ルヘク寛容シテ衝突ヲ避ケムコトヲ試タ
リシニ六月一日ニ至リ衆議院ハ内閣ノ行爲ヲ非難スルノ
上奏案ヲ議決スルニ至リタレハ政府ハ止ムヲ得ス最後ノ
手段ヲ執リ議會解散ノ詔勅ヲ發セラレムコトヲ奏請スル
ノ場合ニ至リ翌二日内閣總理大臣ノ官邸ニ於テ内閣會議
ヲ開クコト、ナリタルニ會、杉村ヨリ電信アリテ朝鮮政府
ハ援兵ヲ清國ニ乞ヒシコトヲ報シ來レリ是レ實ニ容易ナ
ラサル事件ニシテ若シ之ヲ默視スルトキハ既ニ偏傾ナル

日清兩國ノ朝鮮ニ於ケル權力ノ干繋ヲシテ尙ホ一層甚シ
カラシメ我邦ハ後來朝鮮ニ對シ唯、清國ノ爲スカ儘ニ任ス
ルノ外ナク日韓條約ノ精神モ爲メニ或ハ蹂躪セラル、ノ
虞ナキニ非サレハ余ハ同日ノ會議ニ赴クヤ開會ノ初ニ於
テ先ツ關係ニ示スニ杉村ノ電信ヲ以テシ尙ホ余カ意見ト
シテ若シ清國ニシテ何等ノ名義ヲ問ハス朝鮮ニ軍隊ヲ派
出スルノ事實アルトキハ我國ニ於テモ亦相當ノ軍隊ヲ同
國ニ派遣シ以テ不虞ノ變ニ備ヘ日清兩國カ朝鮮ニ對スル
權力ノ平均ヲ維持セサルヘカラスト述ヘタリ閣僚皆此議
ニ贊同シタルヲ以テ伊藤内閣總理大臣ハ直ニ人ヲ派シテ
參謀總長熾仁親王殿下及參謀本部次長川上陸軍中將ノ臨
席ヲ求メ其來會スルヤ乃チ今後朝鮮へ軍隊ヲ派出スルノ
内議ヲ協ヘ内閣總理大臣ハ本件及議會解散ノ閣議ヲ携ヘ
直ニ參内シテ式ニ依リ 聖裁ヲ請ヒ制可ノ上之ヲ執行セ

朝鮮國へ派兵ノ廟
議決定

斯ク朝鮮國へ軍隊ヲ派遣スルノ議決シタレハ余ハ直ニ大
鳥特命全權公使ヲシテ何時タリトモ赴任スルニ差支ナキ
準備ヲナサシメ又海軍大臣ト内議シテ同公使ヲ軍艦八重
山ニ搭シ同艦ニハ特ニ海兵若干ヲ増載シ且ツ同艦及海兵
ハ總テ同公使ノ指揮ニ從フヘキ訓令ヲ發セシムルコト、
ナシ又參謀本部ヨリハ第五師團長ニ内訓シ同師團中ヨリ
若干ノ軍隊ヲ朝鮮ニ派スル爲メニ至急出師ノ準備ヲナス
ヘキ旨ヲ命シ又密ニ郵船會社等ニ運輸及軍需ノ徵發ヲ内
命シ急遽ノ間ニ於テ諸事最モ敏捷ニ取扱ヒタリ斯ル廟算
ハ外交及軍事ノ機密ニ屬スルヲ以テ世間未タ何人モ之ヲ
揣測スル能ハス而シテ政府ノ反對者ハ廟議既ニ斯ク進行
セシテ悟ラス類ニ其機關新聞ニ於テ若クハ遊說委員ヲ以
テ朝鮮ニ軍隊ヲ派遣スルノ急務ナルヲ痛論シ劇シク政府
ノ怠慢ヲ責メ以テ暗ニ議會解散ノ餘憤ヲ洩サムトセリ
廟議既ニ此ノ如ク決定シタリ然レトモ之ヲ實地ニ執行ス

六

ルニ及テハ時ニ臨ミ機ニ投シ國家ノ大計ヲ誤ルナキヲ期
セサルヘカラス故ニ政府ハ慎重ノ議ヲ盡シ更ニ其方針ヲ
確定セリ即チ日清兩國カ各其軍隊ヲ派出スル以上ハ何時
衝突交争ノ端ヲ開クヤモ計リ難ク若シ斯ル事變ニ際會セ
ハ我國ハ全力ヲ盡シテ當初ノ目的ヲ貫クヘキハ論ヲ待タ
スト雖モ成ルヘク平和ヲ破ラスシテ國家ノ榮譽ヲ保全シ
日清兩國ノ權力平均ヲ維持スヘシ又我ハ成ル丈ケ被動者
タルノ位置ヲ執リ毎ニ清國ヲシテ主動者タラシムヘシ又
斯ル一大事件ヲ發生スルヤ外交ノ常習トシテ必ス第三者
タル歐米各國ノ中互ニ向背ヲ生スルコトアルヘキモ事情
萬已ムヲ得サル場合ノ外ハ嚴ニ事局ヲ日清兩國ノ間ノミ
ニ限リ努メテ第三國ノ關係ヲ生スルヲ避クヘシトハ其要
領ナリキ此廟算ハ初メ伊藤總理ト余トノ熟議ニ成リ特ニ
多クハ伊藤總理ノ意見ニ出テ當時ノ閣僚ハ皆之ヲ贊襄シ
聖裁ヲ仰キタルモノナレハ日清交戦中我政府ハ始終以上

七

日清兩國ノ朝鮮ニ於ケル權力ノ争

ノ主義ヲ以テ一貫セムコトヲ努メタリ
我政府ノ決心ハ此ノ如シ然ルニ對手タル清國政府ハ果シテ我ト同一ノ決心ヲ有シ居タルヤ甚々疑フヘキモノアリ抑日清兩國ノ朝鮮ニ於ケル權力ノ争ヤ由來甚々久シケレトモ是レハ茲ニ詳述スルノ必要ナシ而シテ日清兩國ガ朝鮮ニ於テ如何ニ各自ノ權力ヲ維持セムトセシヤノ點ニ至リテハ殆ト氷炭相容レサルモノアリ日本ハ當初ヨリ朝鮮ヲ以テ一個ノ獨立國ト認メ從來清韓兩國ノ間ニ存在セシ曖昧ナル宗屬ノ關係ヲ斷絶セシメムトシ之ニ反シテ清國ハ曠昔ノ關係ヲ根據トシテ朝鮮カ自己ノ屬邦タルコトヲ大方ニ表白セムトシ實際ニ於テ清韓ノ關係ハ普通公法上ニ確定セル宗國ト屬邦トノ關係ニ必要ナル原素ヲ缺クニモ拘ラス責メテ名義上ナリトモ朝鮮ヲ以テ其屬邦ト認メラレムコトヲ勉メタリ特ニ明治十七年京城ノ變亂以後ハ清國カ朝鮮ニ於ケル勢力ハ著シク進ミタルニ相違ナシト

袁世凱汪鳳藻等ノ意見

雖モ凡ソ一箇人ニセヨ邦國ニセヨ已ニ權力ヲ得レハ輒チ其得ル所ニ止ルヲ以テ満足セス愈之ヲ強大ナラシメムト欲スルハ其常情ナリ而シテ清國ノ朝鮮ニ於ケルヤ宗屬ノ關係アリト稱スト雖モ朝鮮其國スラ未タ完全無缺ノ屬邦ナリトシテ甘心シ居ラサルノ觀アルノミナラス常ニ之カ妨碍タルヘキ東隣ノ一強國ノ存スルアリトスレハ如何ニモシテ之ヲ除去セムトスルハ清國政府ニ在テ亦自然ノコトナルヘシ則チ當時京城ニ駐在官タリシ袁世凱ノ如キ年壯氣銳ノ徒カ之ヲ熱望シタルコトハ誠ニ無理ナラヌコトト謂フヘシ
袁世凱ハ明治十七年以來日本ノ朝鮮ニ於ケル勢力ノ何トナク微弱トナリタルヲ見且ツ廿三年憲法實施以後日本政府ト其議會トノ間常ニ相軋スルノ狀ヲ見テ我政府ハ他國ニ向ヒ軍隊ヲ派スルカ如キ大決斷ヲ爲ス能ハサルモノト爲シ此機ニ乘シ清國ノ朝鮮ニ對スル勢力ヲ展サムト志

シ而シテ我邦駐劄ノ清國公使汪鳳藻モ亦我官民ノ爭執日
ナ逐テ劇シキヲ見テ日本ハ到底他國ニ對シテ事ヲ成スノ
餘力ナカルヘシト妄斷シ各其所見ヲ清國政府ニ通告シ兩
者ノ意期セスシテ相合シタルカ如シ是レ清國政府カ最初
ヨリ彼我ノ形勢ヲ誤認シタルノ一因ナルヘシ
又當時韓廷ノ狀勢ヲ顧ルニ世ハ王妃ノ一族所謂閔族ノ專
ニスル所トナリタレトモ其中ニ於テ尙ホ朋黨相爭フノ事
實アリシコトハ掩フヘカラス閔泳駿ハ王室ノ外戚トシテ
勢道ノ職ニ居リ其權力甚々熾ナリシニ拘ラス東學黨ノ亂
起リ官軍ノ數破ルニ及テ内外ノ攻撃ハ一身ニ集リ困苦艱
難ノ際一方ノ活路ヲ求メ清國使臣袁世凱ニ結托シ清國軍
隊ノ派出ヲ請ヒ以テ縹緲ノ策ヲ畫セムトセリ聞ク所ニ據
レハ當時朝鮮政府大臣ノ中特ニ國王迄モ清國軍隊ノ朝鮮
ニ入ルニ於テハ之ニ對シテ日本モ亦出兵スルニ至ルヘキ
カ故ニ清國ノ外援ヲ求ムルハ頗ル危道ナリトシテ泳駿ノ

十

朝鮮國王清國ニ向
ヒ援兵ヲ乞フ

議ヲ非難セルモノアリト云ヘトモ去レハトテ他ニ自ラ進
テ責ニ任シ敢テ難局ニ當ラムト云フ程ノ勇者モナクシテ
閔泳駿ハ終ニ國王ヲシテ清國ニ向ヒ臣ト稱シ其出兵ヲ乞
ハシムルニ至リシナリト云フ
以上ノ事實ハ東學黨ノ亂ニ關シテ清廷ノ外交ヲ誤リタル
ト韓廷ノ内治其方ヲ得サリシ第一段ナリ之ヲ約言スレハ
日本政府ハ最初ヨリ被動者ノ地位ニ立ツモ萬已ムヲ得サ
レハ最後ノ手段ヲ施スニ躊躇セサルノ決心アリシニ拘ラ
ス清國ハ日本及朝鮮ヲ威嚇スルニ先ツ聲ヲ以テシ之ニ次
クニ形ヲ以テスレハ足レリトシ日清兩國ノ間ニ紛擾ノ解
ケサル時ニハ到底之ヲ干戈ニ訴ヘサルヲ得ストノ決斷ヲ
缺キタルモノ、如シ清國既ニ然リ乃チ韓廷ノ如キハ事大
ノ觀念ヨリシテ如何ナル場合ニテモ日本カ清國ニ勝テ得
ヘシトハ夢想ニタモ思ハス俗ニ所謂大船ニ乘リタルカ如
キ安心ヲ以テ清國ニノミ之レ依賴シ居タルナルヘシ蓋シ

十二

斯ノ如キ誤謬ニ陥リツ、清韓兩廷共ニ平壤黃海ノ戰終ル
 マテハ毫モ之ヲ覺リ得サリシハ誠ニ是非モナキ次第ナリ
 第二章 朝鮮ニ向テ日清兩國軍隊ノ派遣
 其後政府ハ六月四日京城發杉村臨時代理公使ノ來電ニ據
 リ同公使カ袁世凱ニ面會シテ朝鮮政府ヨリ愈援兵ヲ清國
 ニ請ヒ清國政府其請求ヲ容レ若干ノ軍隊ヲ朝鮮ニ送ルヘ
 シトノコトヲ確聞セシトノコトヲ知リ又六月五日頃ヨリ
 在天津荒川領事ハ外務省ヘ在北京公使館附武官神尾陸軍
 少佐ハ參謀本部ヘ各清國政府カ天津ニ於ケル出師準備ノ
 模様ヲ電報シ來リ或ハ清國軍隊若干ハ某ノ日ヲ期シ大沽
 ヨリ仁川ニ直航スヘント云ヒ或ハ直ニ山海關ヲ經テ陸行
 スヘント云ヒ又ハ軍需若干ヲ搭載シタル清國運送船ハ現
 ニ大沽ヲ出帆シツ、アリト云ヒ凡ソ此類ノ電信ヲ接手ス
 ル一日數回ニ及ヒ殊ニ在北京臨時代理公使小村壽太郎ヨ
 リ清國政府カ愈朝鮮國ニ出兵スルノ議ヲ決シタル模様確

實ナリトノ電報達シタレハ朝鮮政府カ其内亂ヲ鎮壓スル
 能ハスシテ外援ヲ清國ニ請ヒ清國政府ハ時機ヲ失ハス出
 師準備ヲ爲シ居リ或ハ既ニ多少ノ軍隊ヲ派出シタルヤモ
 計ラレストノ事實ニ付テハ最早毫モ疑ヲ容ルヘキナク從
 テ之ニ對シ外交及軍事上ノ運動ハ片時モ怠ルコトナク先
 ツ清國政府ニ於テ果シテ天津條約ニ據リ其朝鮮ヘ派兵ス
 ルコトヲ我國ヘ行文知照スルヤ或ハ今回ノ出兵ハ全ク朝
 鮮國王ノ請求ニ據ルトイフ口實ヲ設ケ該條約ヲ遵守セス
 忒ニ出兵ヲ行フヤノ事實ヲ確メムトシタリ勿論清國政府
 カ天津條約ニ從ヒ其朝鮮ヘ派兵スルコトヲ我政府ニ行文
 知照スルト否トニ關セス苟モ清國政府ニシテ朝鮮國ニ軍
 隊ヲ派出スルコト確實ナル上ハ日本モ亦朝鮮ニ於ケル日
 清權力ノ平均ヲ保持スルカ爲メニ相當ノ軍隊ヲ同國ヘ派
 出スルコト勿論ナリトハ廟算ノ既ニ定ムル所ナレトモ同
 時ニ我ハ常ニ被動者ノ地位ニ立タムコトヲ欲シ且ク清國